

平成30年度 センター研修

教員のための

自己研修の進め方

アクション・リサーチの手法を用いて



岩手県立総合教育センター

目 次

はじめに ～研修の大切さ～	1
I 自己研修の考え方	2
II アクション・リサーチの手法を取り入れた自己研修	4
III 自己研修の進め方と留意点	6
IV 自己研修を進めるために配慮する事項	9
V 自己研修のポートフォリオ	10
自己研修の進め方	11
VI 自己研修のためのシート	12
自己研修を通して学んだこと	20
おわりに	22

はじめに ～研修の大切さ～

情報化，国際化，少子化，高齢化などが急激に進み，さらに学校では，学ぶ意欲や規範意識の低下，いじめや不登校などの問題等が顕在化している現代社会においては，学校教育や学校教員もまたその変化に伴う課題への対応が求められています。

このような状況の中であって，学校には，確かな学力，体力，規範意識などを確実に向上させる質の高い教育が求められています。

学校教育の充実は，児童生徒の教育に直接携わっている教員の資質能力に負うところが極めて大きく，社会が急激に変化する現在，教員は，絶えず新しい専門的知識や指導技術等を身につけていく必要があります。

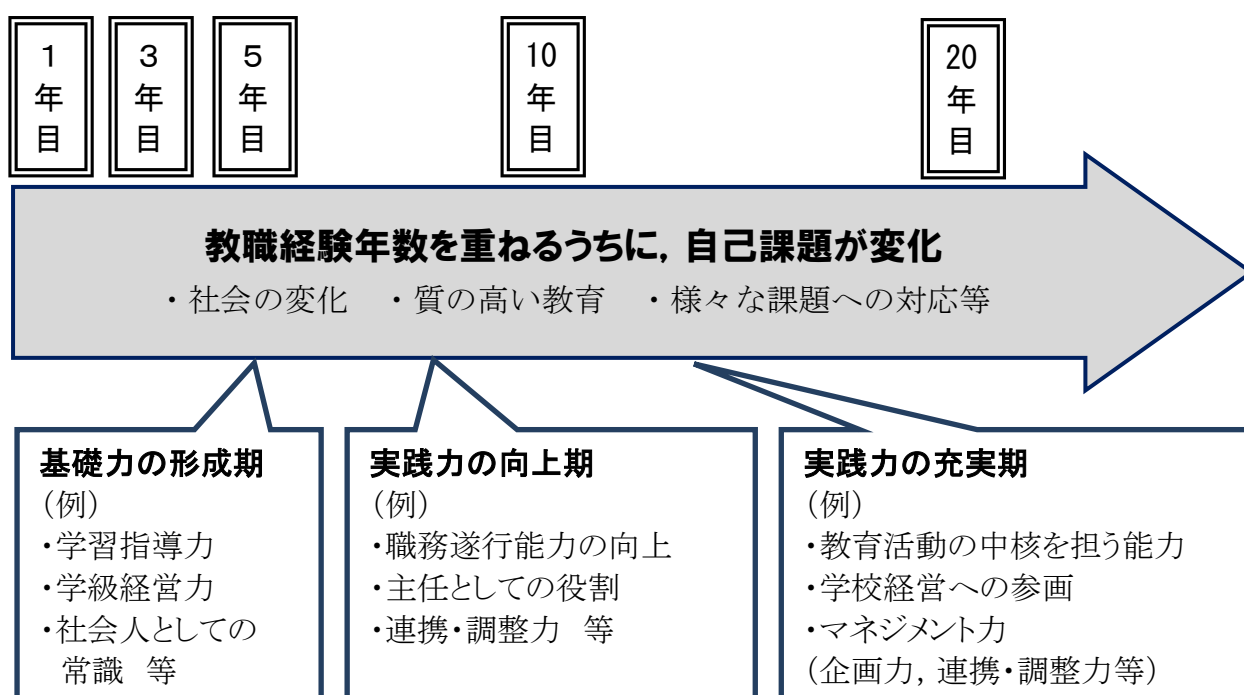
教員研修のねらいは，児童生徒の人間としての望ましい成長・発達を促すことを担う教員としての資質の向上にあります。

それは，教育の目的が，確かな学力の形成に裏付けられた社会人として必要な総合力を身につける「人間形成」にあるからです。一人の人間を育てるという観点で，国や社会の動きを的確にとらえ，家庭・地域と連携・協働しながら様々な課題に取り組むことにより，児童生徒の確かな成長に寄与できる資質と能力を育成していくことが大切です。

I 自己研修の考え方

「これからの教員に求められる資質能力」の中に、「学び続ける教師像」の確立（中教審答申）があります。初任者研修講座センター研修においては、アクション・リサーチという手法で、教員としての力量向上を目指していきますが、この1年間は、「学び続ける」という意味では出発点にすぎません。

次の【図1】のように、教職年数を重ねるうちに、教員として必要な能力が変化していきます。その時々状況に応じて職務を遂行できるように、私たち教員は、教職生活全体を通じて、学び続ける存在であることが不可欠です。



【図1】自己課題の変化

次ページの【表1】「岩手県における教員育成の概要 抜粋」（平成30年度 教職員研修の手引き 岩手県教育委員会）は、改正された教育公務員特例法に基づき策定された、「校長及び教員としての資質の向上に関する指標」を受けた内容になっています。5年から10年でライフステージを区切ってみると、それぞれの段階で求められるものが変化していることが分かります。

私たち教員は、それぞれのライフステージに応じた能力を身につけていくことが必要なのです。そのために、毎日の教育活動の中から課題を見つけ、解決する実践を繰り返すことによって教員としての力量を向上させていくこと、これが自己研修の考え方です。

【表1】岩手県における教員育成の概要 抜粋

キャリア・ ライフステージ	目指す教員像
採用時	学習指導，児童生徒理解，生徒指導，学級経営など，教育活動に関する基礎的な知識・技能を身に付けている。
基礎力の形成期 【初任者研修】 【2年目研修】 【3年目研修】	初任校における学校運営の経験を通じて，教育活動に関する基礎的な職務遂行能力を身に付けている。
実践力の向上期 【教職経験者 5年研修】	複数の学校勤務の経験を通じて，教諭としての基礎を確立し，自らの実践を常に振り返りながら，職務遂行能力を向上させている。
実践力の充実期 【中堅教諭等資 質向上研修】 【授業力向上 研修 30代】	学校運営の中堅として，学校全体を見渡す視野を持ち，若手教員の模範となりながら職務遂行能力を更に高めている。
実践力の発展期 【授業力向上 研修 40代】	中堅としての役割と責任を自覚し，同僚教員の資質向上を支援しながら，校内外に広く目を向け，関係者と連携して学校運営を牽引している。
総合力の発揮期 【授業力向上 研修 50代】	教諭としてのこれまでの実践を基に，総合力を発揮しながら円滑な学校経営に貢献している。

Ⅱ アクション・リサーチの手法を取り入れた自己研修

1 アクション・リサーチとは

日々の教育活動（action）を進めながら行う実践研究（research）です。

何か特別なことを行うのではなく、日々の教育活動の中から、自己の課題を見つけ、解決のための手立てを考え、実行し、その結果を振り返る自分サイズの実践研究です。

2 アクション・リサーチの特徴

アクション・リサーチの特徴として、以下の点を挙げるすることができます。

- ・自分の力量にあったテーマを設定することができる。
- ・実践の振り返りをすることにより、考えを深めることができる。
- ・手立てや計画を見直し、何度も立ち返ることができる。
- ・上司や同僚の意見を聞くことで新たな発見ができる。

本テキストでは「アクション・リサーチ」の手法を取り入れた自己研修の進め方について述べていきます。

3 自己研修（アクション・リサーチの手法）の流れ

本テキストで述べる「自己研修」はすべて「アクション・リサーチ」の手法を含めて「自己研修」と表記します。

自己研修の流れは、PDCA（Plan, Do, Check, Action）のサイクルで行われます。Planは「自己研修のテーマ設定」から「計画立案」まで、Doは「計画実施」、Checkは授業や指導の「結果の観察・分析」、自己研修の課程の「振り返り」および他の教員との「実践交流」、Actionは「自己研修の改善」を示しています。一連の流れは次ページの【表2】のようになります。

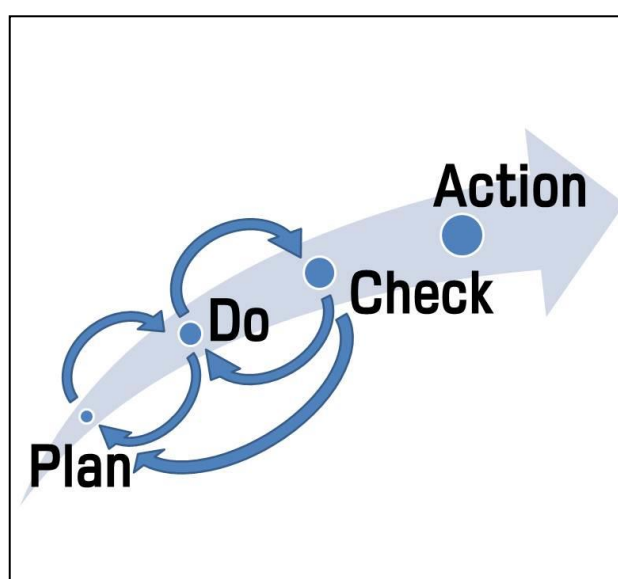
【表2】PDCAサイクルと自己研修の流れ

P (Plan)	自己研修のテーマ設定 テーマの明確化 情報収集・予備調査 方法や手立ての立案 児童生徒のゴール像設定 計画立案
D (Do)	計画実施
C (Check)	結果の観察・分析 振り返り・実践交流
A (Action)	自己研修の改善

具体的な取組については、次のⅢに記します。この自己研修では、「自己研修のテーマ設定」から「自己研修の改善」までの取組がアクション・リサーチの手法になります。この流れは、仮説検証型の研究とは異なるので、下の【図2】のように、思ったような指導の結果が出なかったり、計画立案に不備があったりした場合などは、「Plan」に立ち返り、やり直してもかまいません。

例えば、学習内容を習得させるための「テーマ設定」をした場合、指導案や文献を読み考察を深めます。

しかし、児童生徒の実態にそぐわない計画を立案してしまい、有効な効果が出ない場合もあります。そのときに、なぜ効果が出なかったのか理由をはっきりさせ、再度「情報収集」や「方法や手立て」を見直し、「計画立案」し、実施することも可能です。



【図2】自己研修のイメージ図

このように、自己研修を進めることで、私たち教員の力量をアップさせることができ、さらに児童生徒のために良い学習環境を提供することにつながります。

Ⅲ 自己研修の進め方と留意点

ここでは、自己研修の進め方について具体的に述べていきますが、表記の都合上、自己研修の流れを1から10まで表記しています。前に述べたように、自己研修は見直しや計画立案をやり直してもよい研修方法です。あくまでも表記上の番号としてとらえてください。

さらに、自己研修を深めるためにはポートフォリオの作成を勧めます。一つひとつの過程を記録することで自己研修の振り返りに役立ちます。

自己研修に入る前に…現状把握

教職経験の浅い教員にとっては生徒指導や学級経営、学習指導などについての問題点を見いだすことは容易ではありません。12ページにある「自己研修のテーマ設定シート」の項目に記入してテーマを設定してみましょう。

1 自己研修のテーマ設定

教員は日々指導を行っています。(生徒指導、学級経営、学習指導等) それらの指導上の問題点からテーマを設定し洞察を深めていくことが、自己研修を進める上で大切なことです。

2 テーマの明確化

自己研修のテーマを設定した時、物事の本質を見抜かなくてははいけません。自分が今設定したテーマにはどのような要因があるのでしょうか。教員としての指導力、児童生徒の現状、周りの児童生徒との関わり方など、テーマに関わる根幹を見つめ直すことをねらいとしています。

3 情報収集・予備調査

学習指導には、参考となる文献や研究に関する書物などが発行されています。これらを紐解き、児童生徒の実態に合った情報を収集します。また、学習内容に関わるレディネステストや事前テスト、諸検査等も予備調査として有効になります。

学級経営や生徒指導上の問題を自己研修のテーマとして設定する場合、文献や書物を参考としてもかまいませんが、生徒の実態や環境、要因などの違いによりうまくいかない場合も考えられます。しかし、必要最低限の情報収集や調査に配慮しなければなりません。

4 方法や手立ての立案

「方法や手立ての立案」では、実際にどのようにテーマを解決していくかが鍵になります。ここでは、『明確化したテーマ』について、『具体的な行動』をすれば、『今回のゴール』になるだろう」という仮説を立てると、方法や手立てを具体的に考えることができます。

実際の指導のためにどのような手立てをとるのかについて、14ページのPlanシートに明記してください。

5 児童生徒のゴール像設定

自分が立てた「方法や手立て」を実施した時、児童生徒はどのように変容するでしょうか。

学習指導では、「〇〇ができるようになった」や「事後テストで〇〇点とれるようになる」というような具体的な目標を立てることができると思います。

生徒指導や学級経営の問題では、目に見える数値目標は無理かもしれませんが、「方法や手立て」を講じることにより「〇〇が△△にかわった」や「今までできない〇〇ができるようになった」という児童生徒像を描くことができます。目標達成後の児童生徒の変容した姿を思い浮かべてみましょう。

6 計画立案

自己研修は、「自己研修のテーマ設定」の内容や「方法や手立て」の違いにより期間に長短の差が出ます。たとえば、学習指導についてのテーマを設定した場合、1単位時間で完結する場合があります。また、単元全体を見通して自己研修のテーマを設定した場合、10時間以上の実施期間が必要な場合もあります。

さらに、学級経営や生徒指導についてのテーマを設定した場合、指導を複数回繰り返したり、たくさんの「方法や手立て」を講じたりする場合があります。その場合、長期的な計画が必要になります。

「計画立案」では、自分自身無理のない「方法や手立ての立案」を心がけ、さらに児童生徒への負担も考慮します。

7 計画実施

指導において、自分の「方法や手立て」の妥当性を見極めることや、立てた計画をやりとげることがとても大切です。できれば、実施する際に、他の教員に見てもらい、客観的な意見や受けた指導を、次の「結果の観察・分析」、「振り返り」に役立てましょう。必要に応じて、動画、音声、写真等で記録しておき、分析に生かしましょう。

8 結果の観察・分析

実施後、「児童生徒のゴール像」へどれだけ近づくことができたでしょうか。十分な結果が得られたという場合もあるでしょうが、十分ではなかったという場合も考えられます。

自己研修では、「方法や手立ての立案」に立ち返り、繰り返し行うこともできます。

9 振り返り・実践交流

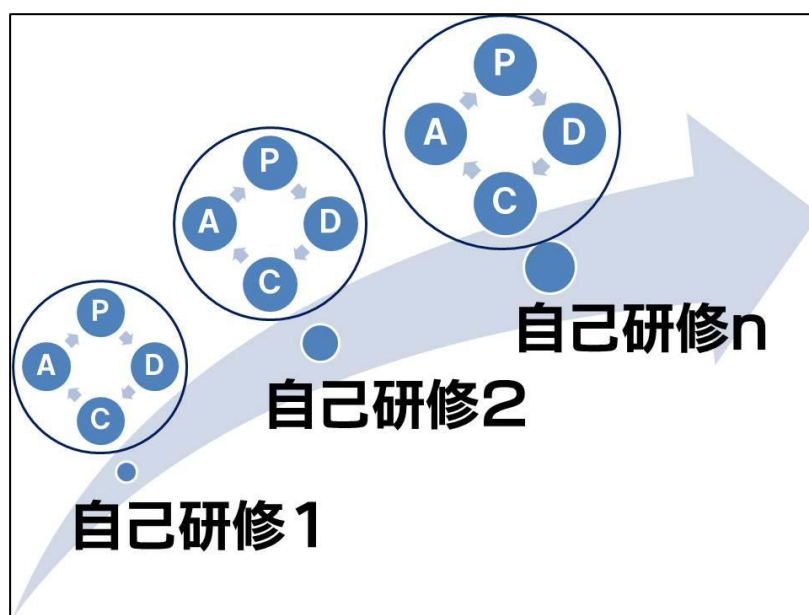
「自己研修のテーマ設定」から「結果の分析・考察」までを振り返り、文章でまとめましょう。枚数や文字数は指定しませんが、自己研修の取組を他の研修者と交流するためにまとめておきましょう。

さらに、「振り返り」でまとめたレポートを基に交流をします。交流の場としては、校内や校外での研修会が考えられます。他の教員に自分自身の取組の様子を紹介し、聞いてもらい、意見や他者の実践事例などから、さらに取組の方向性を確認したり見識を深めたりすることができます。

10 自己研修の改善

「振り返り」や「交流」をすることにより、新たな課題や問題点を見いだすことができるのが、アクション・リサーチの手法です。そこで見いだしたテーマを用いて、さらに自己研修を繰り返し行い、見識を深めることも考えられます。

また、【図3】のように自己研修を繰り返し行っていくことが、「学び続ける教師像」の確立へつながっていきます。



【図3】自己研修の全体像

IV 自己研修を進めるために配慮する事項

1 自己研修の目的を確認する

自己研修を始める前、または研修中において、「なぜ、何のために」この研修をしているのかを確認することが大切です。自己研修は自己の資質を向上させ、さらには児童生徒の学習環境を改善していくものです。

自己研修の各段階で目的意識をもち、自ら進んで研修を行いましょ。

2 自分自身のニーズを大切にす

自己研修を進めるにあたっては、自分の現在の課題、つまり、自分自身のニーズが出发点になります。児童生徒の様子や自分自身を見つめ直し、今自分に必要なことは何かを明確にして、テーマを設定し自己研修を進めていく必要があります。

自分自身のニーズを出发点に研修を進めていくことは、主体的な研修につながります。単なる思いつきでテーマを設定するのではなく、学習環境を見つめ直したり、情報収集して見識を深めたりしながら、今取り組むべきテーマを明らかにする必要があります。

3 児童生徒と共に成長していく視点を大切にす

自己研修は、テーマ設定し解決の手立てを実行しながら、実践を積み重ねていくことで、研修に取り組む教員自身の成長につながります。児童生徒は研究の対象者ではなく、共同研究者と考えてください。教員の実践（自己研修）が学習環境を改善し、児童生徒のために生かされます。「計画」、「実践」、「振り返り」、「改善」のサイクルを有効に生かし、教員と児童生徒が共に成長していくという視点を大切に自己研修を進めましょ。

4 周囲の教員や上司との対話を大切にす

自己研修を進める上で、うまくいかない時、思うように進まない時には、一人で抱え込まず、周囲の教員に相談してることが大切です。同じような経験をしたことがある教員から、的確なアドバイスをもらえる場合があります。

「実践」を行う場合、可能であれば周囲の教員に参観してもらいましょ。参観したことを基に、対話をし、自己研修の妥当性や「手立て」に対する考えを深め、情報を共有することで互いの専門性の向上につなげていきます。

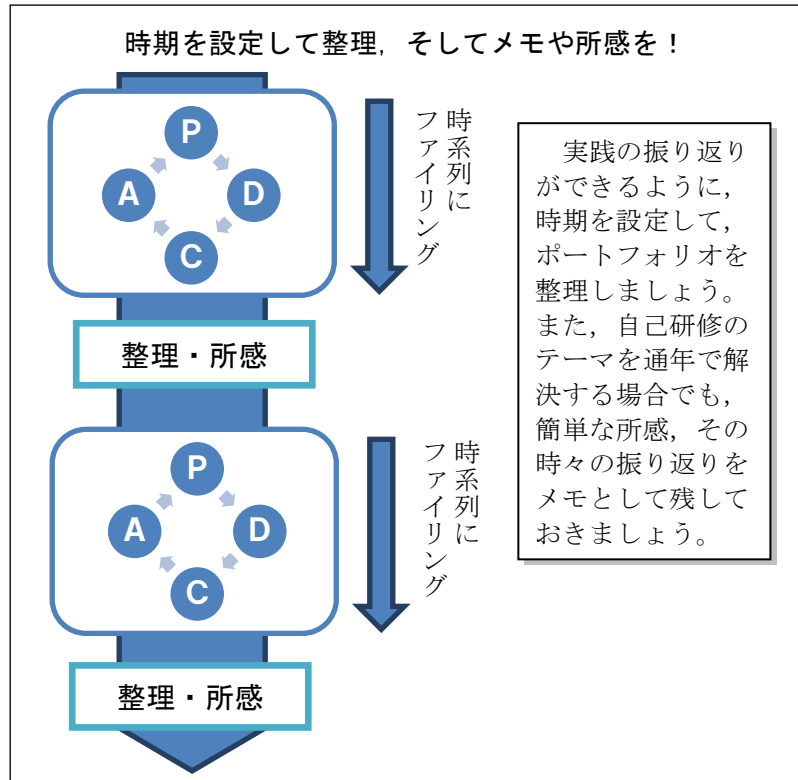
5 客観的に振り返る機会を設定す

「振り返り」でまとめた記録を活用しながら、自己研修全体を振り返る機会を設定していくことは重要です。時には、他の教員からも意見をもらい、客観的に評価することも必要です。自分自身の取組を振り返り、決して独り善がりの指導にならないよう、謙虚に周囲の声に耳を傾け、自己の指導を見つめ直し、児童生徒の学習環境の改善に努めていかなければなりません。

V 自己研修のポートフォリオ

1 自己研修のポートフォリオとは

自己研修のポートフォリオ（以下、ポートフォリオ）とは、自己研修のテーマを解決するために取組を行う中で作成、収集した資料（指導案や実践記録、教材、レポート等）を蓄積、整理したものをいいます。



2 ポートフォリオの取組から期待できること

ポートフォリオの取組を行うことにより、以下の点が期待できます。

- ・自己研修の足跡を記録として蓄積することができる。
- ・蓄積、整理することで、自分の実践を振り返り、自己の成長や新たな課題が見え、レポートにまとめることができる。
- ・レポートやポートフォリオを持ち寄り、お互いの教育実践を交流することで自他の成長を確認したり、新たな自己課題やその改善に向けた手立てに気づいたりすることができる。
- ・新たな自己研修テーマの設定、その改善に向けた取組がサイクルとなり、自己研修が継続していく。

3 ポートフォリオに綴じ込む資料例

- ・自他の教育実践の成果と課題
- ・指導案
- ・教材研究メモ
- ・学習プリント
- ・文献
- ・授業記録
- ・写真、動画や音声
- ・研究会記録（他の教員から指摘された内容や改善策等）

自己研修の進め方

自己研修のプロセス

確認しておく事項

現状把握

- 学習指導や生徒指導, 学級経営で, 順調に進んでいる点, 問題点は何か。

Plan

自己研修の テーマ設定

- 学習指導や生徒指導, 学級経営の問題点から, どのようなテーマを設定しますか。
- 自分の理想とする指導と現在の状況を比べ, どのようなテーマを設定しますか。

テーマの明確化

- 自分の設定したテーマにはどのような原因や要因がありますか。
(指導力, 周りの児童生徒との関わり方や実態など。)

情報収集・ 予備調査

- 文献や書物などで, どのような内容を調べ, 明らかにしたいですか。
- 質問紙を利用した, 児童生徒の意識調査や各種テストで, どのようなことを明らかにしたいですか。

方法や手立ての立案

- テーマの目標を達成するためには, どのような指導を行えば効果があると思いますか。

児童生徒の ゴール像設定

- テーマの目標達成後の児童生徒の姿がはっきりとイメージできていますか。

計画立案

- どのような指導を計画しますか。(短期か長期か。どのような内容か。)
- 実施前, 実施中, 実施後に進めなければならないことは何か。

Do

計画実施

- 計画を基に, 無理なく実施できていますか。
- 実施の様子を他の教員に見てもらい, 客観的な意見や指導をいただきましょう。

Check

結果の観察・分析

- 自分の理想とする児童生徒像へどれだけ近づくことができましたか。

振り返り・実践交流

- 自己研修のテーマ設定から結果の観察・分析までを振り返り, 効果があったことを簡潔にまとめましょう。
- これまでの実践から, 明らかになった点, 次に課題と思われる点は何か。
- 振り返りをもとに他の教員等と交流し, どのような新たな手立てや問題点を得ることができましたか。

Action

自己研修の改善

- 発見した新たな手立てや問題点から, 次の自己研修へどのように取り組むか設定しましょう。

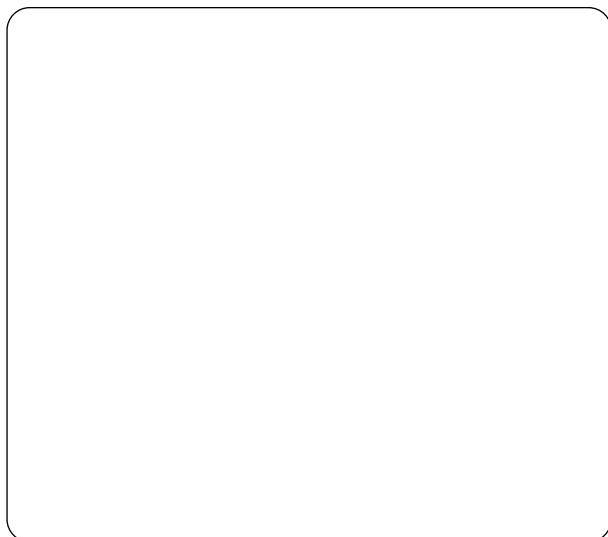
VI 自己研修のためのシート

自己研修の進め方

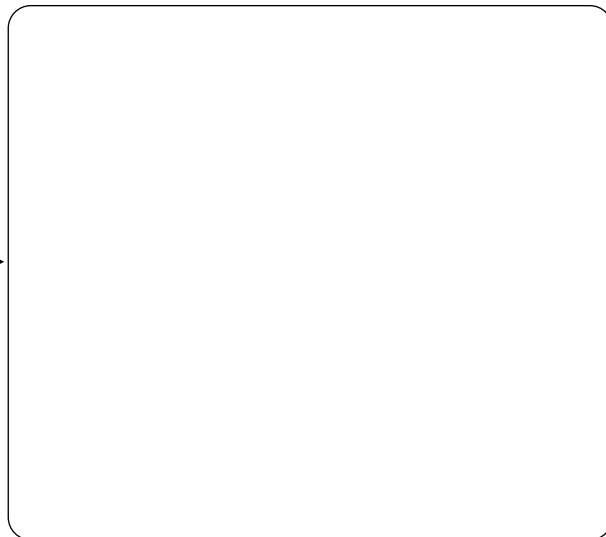
自己研修のテーマ設定シート

■次の4つの項目について考え、書きやすいところから書いてみましょう。

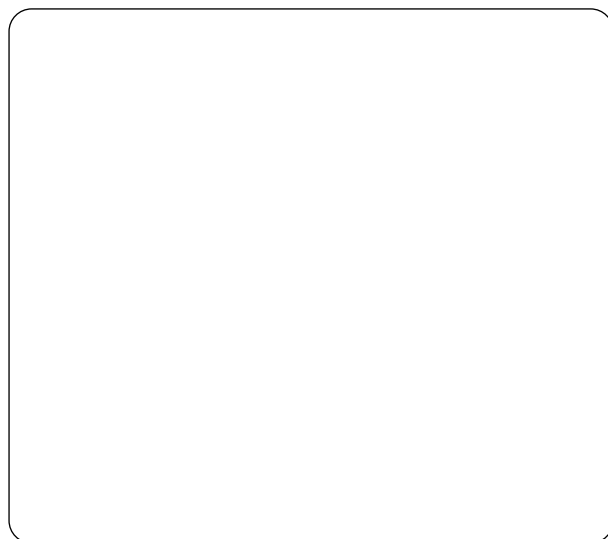
【児童生徒の現状】



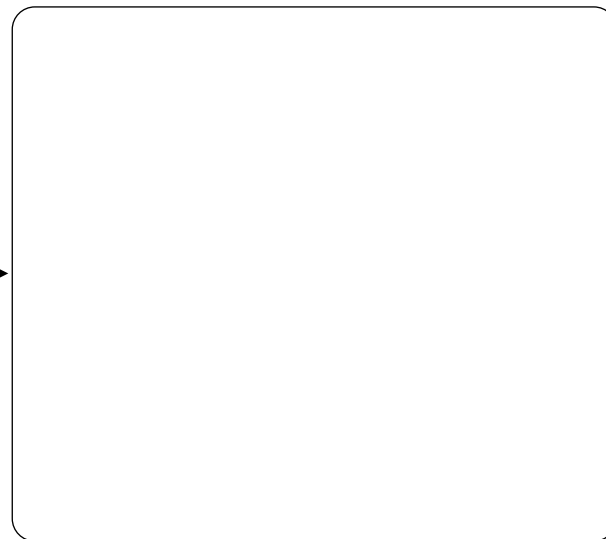
【目指したい児童生徒の姿】



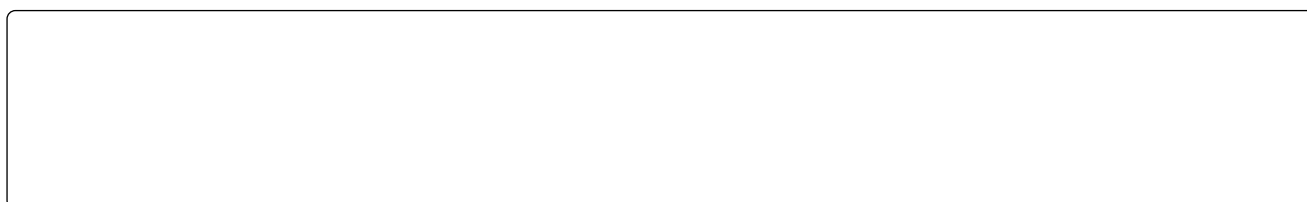
【教員（自分）に起因する要素】



【教員として高めたい力量】



■上の4つの項目を参考にして、取り組む「自己研修のテーマ」を書きましょう。



自己研修のテーマ設定シート **記入例**

■次の4つの項目について考え、書きやすいところから書いてみましょう。

【児童生徒の現状】

- ① 指示待ちの子供が多く、積極的な活動が行われない。
- ② 班、グループでの話し合い活動が活発に行われず、思考の深まりがない。
- ③ 挙手・発言する子供が固定化している。

【目指したい児童生徒の姿】

- ・ 互いの良さを認め合い、共に学び合える（友達の発言を受けて、自分の考えとの相違点に気付いたり、新たな考えを広げたりできる）。
- ・ 主体的に課題に取り組み、自分の考えを根拠を持って説明できる（自分の思いや考えを自分の言葉で話すことができる）。

【教員（自分）に起因する要素】

※ここが
メタ認知

- ①について、説明や指示が多く、子供に考えさせたり、判断させたりする場面の設定が少ない。
- ②では、話し合い活動の具体的な手立てや、子供の考えを広げる発問が不得手。
- ③は、安心して発言できるような、学級づくり、授業づくりが十分に行われていないことが要因だと考える。

【教員として

高めたい力量】

※メタ認知にもとづく
自分に不足している
指導力

- ・ 子供の学習意欲を喚起するような、学習課題を設定する力。
- ・ 活発な発言、意見交流がなされる発問の仕方。
- ・ ペア学習やグループ学習を運営する力。
- ・ 子供同士の円滑な人間関係を育むことができる学級経営力。

■上の4つの項目を参考にして、取り組む「自己研修のテーマ」を書きましょう。

「子供が自分の力で話すことができる」授業をしたい。

※優先順位の高い項目に絞って具体的にテーマ設定をすることが大切です。

Planシート

■自己研修のテーマ

■テーマの明確化

■情報収集・予備調査

■方法や手立ての立案

■児童生徒のゴール像設定

■計画立案

Planシート

記入例

■自己研修のテーマ

- ・自分の思いや考えを自分の言葉で話すことができる授業づくり。

■テーマの明確化

- ・自分の思いや考えを自分の言葉で話すために必要なことは、話すための環境づくりと授業技術の向上ではないだろうか。

■情報収集・予備調査

- ・事前アンケートを実施
- ・アンケートの結果から見えたこと
 - (1)話すことに不安感を持っている。
 - (2)全体の場で話すのが苦手。
 - (3)考えたことを言葉にすることが苦手。
- ・2つの文献「ペア学習の手引き」、「学び合う学習ルールの確立」を授業の実践計画に役立てる。

■方法や手立ての立案

- ・一人一人が自分の思いや考えをもてるようにする。(途中まででもよい、うまくまとまらなくてもよいこととする)
- ・調査した文献をもとにペア学習のルールを示し、さらに、話型を示したり、予め書かせたりする。
- ・普段の活動から、近くにいる相手に自分の思いや考えを話す機会を設ける。

■児童生徒のゴール像設定

- ・自分の思いや考えを自分の言葉で話すことができる。
- ・友達の発言を受けて、自分の考えとの相違点に気付いたり、新たな考えを広げたりできる。
- ・今回のゴールは、となりの子供に話せるようになることとする。

■計画立案

4月 アンケート（事前）作成
先輩に見ていただき修正後実施
アンケート結果分析
授業計画
5月 授業実践
6月 授業実践
7月 授業実践
アンケート（事後）作成と実施
アンケート分析
ここまでの報告書を作成

8月 「校内研修」で交流
交流をもとに新たなテーマ設定
9月 次の自己研修計画と授業計画
10月 (次の計画に従って実践)
11月 (次の計画に従って実践)
12月 (次の計画に従って実践)
1月 実践の分析とまとめ
2月 報告書作成
3月

Do & Check シート①

記入例

■計画実施記録 (Do)

日 時	実施内容や指導内容
5月□日	アンケートの実施（事前）と分析
5月○日 ～7月△日	授業実践（校内指導教員から指導をいただく）
7月□日	アンケートの実施（事後）と分析
8月□日	自己研修の振り返り（校内指導教員）

■結果の観察・分析 (Check) (○成果, ●課題, ◇手立て, ?疑問)

5月□日 アンケートの実施（事前）と分析

- 話すことに対して自信がない、不安があると回答した児童が予想以上にいた。
- 間違えることに対して強い抵抗感をもっている児童が多いことが分かった。
- ?児童の不安や抵抗感を取り除くにはどうすればよいか。

5月△日～ 授業実践

- ◇不安になる要因を取り除く配慮（途中でもよい、話せるところまででよい）をした上で、文献を参考に、ペアでの交流を取り入れた授業実践を行った。
- 発表する際の子供の表情の変化、意欲の高まり、他者意識が感じられるようになった。
- 途中まででも話してみようと思って手を挙げる児童が増え、その子が困ったら助けてあげるという雰囲気が出てきた。
- 何をすればよいか分からず、学習が停滞している児童も見られる。
- ◇発問や指示の言葉を整理し、短く話すようにする。
- 発問の整理を行ったことが、児童の聞き返し、迷いの減少にもつながった。

7月□日 アンケートの実施（事後）と分析

- プラス傾向に回答が移る児童がほとんどであった。記述内容からも、話すことに対する自信がついてきている様子が感じられた。
- 一方わずかではあるが、マイナス傾向の回答を示した児童も見られた。その児童にとってペア交流が負荷となっていなかったか検討が必要である。
- ◇ペア交流の負荷の原因を、参観した先生方のアドバイスや文献、子供の聞き取りなどから分析して改善したい。
- ◇グループ学習の方法について学び、次のステップにつなげたい。

自己研修を通して学んだこと

第58回岩手県教育研究発表会「教員の人材育成分科会」説明者の感想より

情報収集と児童の実態把握の重要性について、適切な実態把握が有効な手立てに結びつくことを実感しました。前、後ろの学年でどんなことを学習するのか明確にして、目の前の子どもたちの到達度を分析し手立てを考えていきたいと思います。

児童の実態に合わせ情報を取捨選択することについて、様々な文献や先輩から多くのアドバイスを全て生かそうとするのではなく、自分なりにそれらを取捨選択して行きました。そこにすごく難しさを感じましたが、ポートフォリオが取捨選択の過程となっています。後で見返したり、分類整理を常にしやすい状態にしたりしていくことが大事だと学びました。

PDCAのAの部分の重要性について、本学級で実践した後、他の学級でも実践してもらいました。そこで補助の仕方や仲間との関わり方について新たな課題も見られました。そういった課題を一つずつ解決していくことが、結果的には子どもたちの力の向上につながるものだと考えます。

学校規模に応じた自己研修のあり方について、本校では学級数、教員数が多いため、多くのアドバイスをいただく機会に恵まれました。しかし、今後は規模の小さい学校に赴任していくことも考えられます。自己研修では自分自身でしっかりと力を高めていくことが重要と考えますので、自己研修の方法をしっかりと理解し、学び続ける姿勢を常に大切にして職務にあたっていきたいと思います。

小学校 教諭

自己研修を進めるのはとても大変でした。体育祭、新人戦、文化祭と様々な行事が続きました。初めて担任をもちにいただき、学級経営や生徒指導がうまくいかず、教材研究や教材開発に十分な時間を確保することができない日々もありました。

また、一つの単元が終わる毎に生徒の実態を見とって私なりに「こういう手立てをとった方がいいのではないか。」と考えて実践を進めましたが、手立てがなかなか実態に合っていない事も多く、思うように生徒の力を伸ばすことができないと悩む日々もありました。

しかし、生徒のワークシートを見ると何も書いていなかった生徒が、1行書けるようになっていたり、一つの資料しか読み取ることのできなかつた生徒が、二つ読み取ることができるようになっていたりとしこずつですが確実に生徒たちは成長していました。「先生できたよ。」と報告しに来る時の生徒の笑顔が私にとっては大きな喜びでした。

これは同じ社会科の先生はもちろん教科や学年の枠を越えて多くの先生たちに、私自身ご指導を頂き授業改善をはかることができたからではないかと考えています。

また、このように自己研修の機会をいただくことで、こういう生徒を育てたいという「思い」や「願い」をしっかりとって生徒と向き合うことができました。自己研修で学んだPDCAサイクルの重要性を意識して今後も生徒たちと共に成長していきたいと思っています。

中学校 教諭

クラス経営を深く考えるということで、生徒とじっくりと向き合うよい機会を得たのだと思っております。初めての担任であり全体の流れを把握するだけで精一杯であり試行錯誤を繰り返している日々であります。

そのような中ではありますが、目の前にいる生徒一人一人にとって望ましい将来とは何であるのか、何を欲しているのか、何がその生徒にとって必要なのかということを考え、そしてその生徒の個性を含めた能力を伸ばしてあげるためには私は何をどうすべきなのかを常に考えて自己研修を行ってまいりました。悩んだり行き詰まりを感じたりした時こそクラスに行き生徒と雑談をしてきました。そのように生徒と関わりをもつことで様々なアイデアも浮かんだように思います。

今後もホームルームが生徒にとって居心地がよいものとなるように、また生徒がめざす進路の礎となっていくように担任としてこれからも心を砕いていきたいと思っております。

高等学校 教諭

この実践を通して私自身学んだことが二点あります。

一点目は児童の実態や視点に立って手立てをきちんと考える大切さです。私は排尿＝トイレでするものという先入観があったように、児童がつまづいている点に気づかず、かけ離れた手立てを組んでしまいました。児童自身の実態や気持ちなどを考え、何をすべきかがわかるための支援をしていかなければならないと強く感じました。

二点目は、教員の称賛が課題達成の要素になるということです。排尿が成功した際大きく称賛され共感されたことで「これはマルなのだ。」と何をすべきかがわかり「やった」とか「うれしい」という気持ちを児童がもつことができたと考えます。

今回の自己研修において、PDCAサイクルを繰り返しそのつど児童の変容に立ち返り、うまくいかない状況と支援を見つめ直すことが有効な支援に結びつくのだと改めて考えることができました。これからの指導支援にいかしていきたいと思っております。

支援学校 教諭

おわりに

昭和39年3月に岩手県教育委員会が策定した「教育基本計画」に、当時の教育長である工藤巖氏が、次のような一文を寄せています。

もとより民主主義のもとにおける教育は、人間尊重の精神を基調として、絶対的・普遍的価値に向かって人間を高めることをめざし、何ものの手段ともならない自己目的性を有することはいうまでもない。しかし一面においては、未来の社会を形成し、文化経済の発展を担う人間の育成という、いわば教育のもつ普遍的立場をふまえながらも、将来における岩手の開発と発展のためには、何よりもまずその担い手たる人間の育成と、そのための教育条件の整備が急務であると信ずるものである。

(岩手県教育委員会 1964)

この「教育基本計画」は、昭和36年に実施された全国一斉学力調査の結果から、岩手の教育はこれでよいのかという声を受け、策定されたものです。

私たちも、先人の想いを共有し、私たち自身の学ぶ姿や生き方を通して、岩手の未来を担う児童生徒の育成のために歩んでいきたいものです。

教員のための
自己研修の進め方
アクション・リサーチの手法を用いて

平成30年 4月

発 行 岩手県立総合教育センター
花巻市北湯口 2-82-1
〒020-0395 TEL 0198-27-2711
発行者 岩手県立総合教育センター
研修推進委員会